

コレクターとしての原一族

— 岸田劉生と工芸家たち —

発表者：藤嶋会員

原善一郎や西郷健雄らの原一族がどのようにコレクターとしての活動をしたのかについて発表がありました。

歌人の河杉はつが「思い出の人々」（『市民グラフヨコハマ』No.50）の中で、「原家のお食事は、食堂で、ご家族そろって頂きました。（略）その食堂の壁には岸田劉生先生の茶わんとりんごの静物画が、そのお隣の部屋には、前田青邨先生の「竹取」が掛けてございました。・・・」と語っています。また後に神奈川県立近代美術館の館長になる土方定一は『岸田劉生』（アトリエ社）の中で、「この芝川照吉は鶴沼に移って岸田劉生に「横濱連」（原・西郷）のパトロンがつくまで、代々木時代からの貧しい劉生及び草土社のよきパトロンであったようである」と記しています。今回の発表は、三溪を継ぐ筈であった善一郎及び西郷健雄等原一族がどのように岸田劉生のコレクターとして活動をしたか、その活動が関東大震災で途絶えるまでの大正のよき時代を描きます。



発表の様子



柏木副館長に来ていただきました

横浜美術館からの連絡

平成25年度から10年間の横浜美術館の指定管理者に指定されている公益財団法人横浜市芸術文化振興財団は、その事業計画に原三溪市民研究会との共同研究を盛り込んでいます。横浜美術館の柏木副館長から、この先3年程度の見通しや、今年度の原三溪市民研究会の会場確保の状況について連絡がありました。